
傍から見たら不良男 2

面目躍如

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍からみたら不良男2

【Nコード】

N5572B

【作者名】

面目躍如

【あらすじ】

強面だった自分を好きになってくれた彼女達にまだまだ振り回される主人公ひのきりつや檜慄夜を中心に恋人も了解済のむしろ楽しんでる恋闘争がはじまる。もう俺の平穏な日々は帰ってこないな

第一話 苦境を越えて（前書き）

久しぶりの人はお久しぶりです。初めての人は初めまして

告白し楽しい毎日のはずが

彼女達はあきらめていなかった。慄夜の

苦悩は続く

第一話 苦境を越えて

楽しい楽しい恋人生活が始まるはずだったのに、どうして神様は俺に問題ばかりくれやがるんだ。

俺の手にある手紙、これは朝、みんなから渡されたもの。鬼気迫る顔で囲まれたら受け取らざるおえなかった

内容は言うまでもなく愛の告白。頭痛のもとだ。

「俺の何が良いんだ？」

机に向かいながら俺はそうつぶやく。

楓さんへの想いに嘘はないでも心が揺れないと言えは嘘になる。

一番衝撃的だったのは妹の皐月の気持ちだ。

朝日先輩への告白の明くる日、妹は俺を公園に連れ出した。雨が降っていたにもかかわらず傘もささないで俺は驚かされっぱなしだった。そこで語られた俺に向けての想い。

真摯に向けられる眼差しに俺は苦しげに拒否の解答を吐いた。悔いはないとか言ってたけど顔は苦しそうに歪んでた。

妹はすぐに走り去った。俺はゆっくり帰った。優しくしてはいけなかった。でも優しくなければならなかった。俺たちは家族なんだから。たった三人だけの。

俺は手紙を書いた。俺はもうあいつの傍にはいれない。もうあいつを護れない。そう選択したんだ。俺は。だからあいつに全てを教えることにした。これが最後のあいつへの気遣い。俺はあいつを傷つけてしか、背中を押してやれない。

妹は一週間程部屋から出てこなかった。だが、俺は無理強いはしなかった。

やっと出てきた妹はやつれていたが遣り遂げたようだ。今までありがとう。と言った妹の顔を見て、俺の心は潰れそうになった。もう大丈夫と言う妹は哀しげに笑っていた。

その後だが妹はジジイとばあちゃんの家に住んでいる。俺は一人暮らし。慣れるまで淋しそうだ。ついでに髪は黒に染めた。これからの騒動の原因になるとも知らずに。

あいつらへの返事はした。もちろん否定。

あいつらに俺は好かれるようなことは何もやってない。でも、俺を好きだといったあいつら。俺はあいつらと、どんな顔をして会えば良いんだ？

それが朝起きたら思ったことだ。

杞憂だったがな。あいつらはすこぶる元気だ。なぜか通学路の違う加奈や彩菜までもが一緒に歩いている。あいつら曰く

「途中まで一緒に行く」

らしい。俺の腕にすがり付いているのは宇美だ。時折楓さんを見ている。もう片腕は加奈が。師走には全て話してあったがこの光景に師走はきく。

「おまえ、全員ふったんじゃないのか？」

「ああ。その通りだ。楓さんが好きなら好きなままで良いよなんて

言わなければな」

横目で楓さんを見ていると彩葉に頭をこづかれた。

「私さ。嘘つかれてたの償われてないよね」

そうだった。ばれたんだったな。はてさてどうしよう。

俺が悩みだすと意を決したように彩葉は言った。

「あのさ、今度の日曜日さ。一緒に町に…」

「ここら！何抜け駆けしてんの！」

「なら私と…」

「いやいや、私と」

「おまえら、俺の意見聞く気ないだろ」

ざわざわ騒ぎながら俺たちは学校に行く。普通の生活は遠退くばかりだ。

でも、こんな生活も悪くはない。俺にとってマイナスになるとしてもな。

第二話 ストーク ストーク ストーカーって（前書き）

特にありません

第二話 ストーク ストーク ストーカーって

俺の生活は一変した。

人間って容姿で扱い方変わるんだな。金髪から黒髪に変えただけで誰も恐がらなくなったと言うよりも女子に寄り付かれるようになった。特に後輩を中心に。もとより勉強もスポーツもできたわけでも人気に拍車をかけている。

下駄箱の前で深呼吸。ゆっくり開ける。中から手紙の雪崩が起こった。

「またか」

隣を見ると師走も落ちた手紙を拾っていた。律儀にあいつは返事を返す。だから何度も送る奴も多いらしい。俺はごみ箱にポイ、終わりだ。問題は面と向かっての告白された場合だ。

泣かれると困るからいちいち気を回さなければならぬ。飽きたよ。

「先輩！あの……」

ほらな来た。

「悪い俺には彼女がいる」

「でも、朝日先輩はいいよ言ってもって言われましたっす」

楓さん遊んでるな俺で。そんなくいやめさせてくれないか？

後輩の子は納得してくれたようで去っていった。この頃の子はさばさばしてるな。

そんなオッサンみたいなことを考える俺がいた。

まさかあの名も知らない後輩からストーキングされるとはつゆにも思わずに。

「俺、今日、ちょっと師走に誘われてるから先に帰るな」

「イエッサーさ」

楓さんはとても温厚というか。心が広いとかそんな感じだな。助かる。

「いってらっさい」

新婚生活のときもこんなならいいね。

手を大きく振り俺は送り出され用件を済ませるために師走と歩きだした。

結構あっさり終わり。帰宅の戸につくはずだった。

誰かついてきている。自意識過剰とかじゃない。本当になんかいるんだ。

「誰なんだ？」

トンネルを走り抜ける。すぐにトンネルの影に隠れる。するとそいつも走った。そしてこけた。

「いたいっすー。いたいっすー」

ん、この特徴のある口調は。

「おまえは朝の…」

気付いたようでその後輩は俺に振り向くと一人で騒ぎだした。

「いや、ちがうんすよ。ただ、先輩が気になって追い掛けただけなんです」

「それを俗にストーカーっていうんだが」

「はう……だって先輩のこと好きなんですっすよ。近づきたかったんすよ」

まったく俺はつくづく幸せものらしい。そして彼女は不幸せのようだ。

頭のうえに手をおき、かき回した。優しく撫でるように。後輩は気持ち良さそうに目を細めている。

「付き合ってはやれないだが先輩だしな話相手くらいにはなってるよ」

「ふぁいっす」

恥ずかしそうに体を放した。すぐに反対方向に走りだした。手を振りながら 「またっす」

と元気に走った。根は明るいのかな。

帰った家は少しばかり感傷的になった。

第三話 弁当は凶器だな（前書き）

遅れましてすみません

第三話 弁当は凶器だな

「もう食えん」

「あと二十八個だよ」

俺の前に物凄い量の弁当がある。十二個は、食べ終えた。

「まだまだあるんだよ」

楓さんは俺の横で弁当を出し続けている。

俺は今更後悔し始めた。

「27」

泣きながら渡されたら受け取らざる終えなかったんだ。

「26」

愛情は腐るほど入ってるのだろうが胃もたれの原因にしかならない。初々しさは微笑ましいのだが。

「25」

学校の屋上。

「24」 俺、楓さん、師走、忍、妹、宇美というお決まりのグループだ。

「23」

妹と宇美はときどき仲の良い同級生と食っているのだが一応お決まりだ。

「22」

俺はひたすら手作り弁当を食べる。おいしかりうがんなこと考えず食べる。無我の境地だ。

「21」

今の俺に怖いものはない。

「20 ジャストー！」

ドンッと荒々しくドアが開かれた。そこからでた奴は……

「19」

「こんにちわっす！先輩！」

ストーキング女の再来だ。元気すぎるぜ。

「18。ペース落ちてきたよ？」

俺はその手に握られているものを見て、後退りした。前言撤回、重箱は無理だ。胃はパンパン、吐きそうなんだ。

「17。でも増えそうだね」俺は口をパンパンにしながらも、ストーキング女にアイサインを出した。

『無理。絶対無理』

「16、もてもてだねっくん」

「え？そんなに食べたいですか？いいっすよ」

うれしそうに弁当を開き始める。完璧に勘違いされた。よくよく気付けば、ストーキング女の後ろにまだ二人女子がいた。ストーキング女は二人にうれしそうに話し始めた。おかげで反論する機会を失い、また弁当を掻っ込む。

「15、14、ハイペースになったねー」

「どうっすかー？先輩優しいっすよ」

「そうですね」

と上品そうでおしとやかそうな女子が答えた。一方もう一人の不機嫌そうな女子は

「顔は合格、性格もよしというわけだな？」

「13、ガンバリっくん」

「そうなんすよ。あこがれっす」

しかめっ面の女子は俺をなぜか睨む。この頃、特に女心がわからんな。

「12」

「どーしたの？」

おしとやかそうな女子が気付いたようで不機嫌そうな女子に聞いた。

「11、10」

「別に…」

「別について顔してない」そう言うとおしとやかそうな女子が抱

きついた。

「ち、ちよっと！」

「笑うまでこうしてる」

「わかったから…」

と、あきらめたように笑った。なかなかやわらかく笑うもんだ。

「9、8」

そんなことをやっていた手前。ストーキング女は宇美と妹を指差し絶句していた。妹は

「ちやお」といい。宇美はペコペコ頭を下げていた。

「7、6。もうちよいだよー」

「どうしてなんすかー?! なんで、うーちゃんとさーちゃんいるんすかー?!」 知り合いだったのか…って、無視だ無視。

「5、4」

「若いっていいね」

と、師走。

「本当ね」

と忍。

「ずるいっすよー! うーちゃん、さーちゃん!」

「私、妹だし」

と平然。宇美は詰め寄られワタワタ。

「3、2」

「しらなかつたっすよー。もっと前に教えてほしいっすー!」

「言う必要ないじゃない」 いや違うな。あいつはおちよくって楽しんでるのさ。そういう奴なのだ。

「ラストだよー! りっくん」

「よし。ラスト、いただきます」

「まさか狙ってるんすかー!」

「ちが…そういうわけじゃ…」

「やっぱりそうなんすね! こうなったら負けられないっす!」
そう言う

「ごちそうさま」といった慄夜に抱きついた。皐月は眉をぴくりとさせ、宇美は顔を真っ赤にさせ、慄夜の右手に抱きついた。左は楓。女子三人にくっつかれた慄夜であるが問題は一つ。くっつかれたことによる食物の逆流。

女子たちも慄夜の異常に気付き、慄夜を放すと慄夜はトイレに走った。

「とんだ目にあった」

「すまないっす」

本当に反省してるようなので許した。

「いやいいさ」

「やっぱり優しいっす」

うれしそうに微笑んだ。

「兄は優しすぎる」

「そのー私も…」

妹はともかく宇美がそんなことを言うとはめずらしい。

ストーキング女の後ろにいた女子が近付き頭を下げた。

「初めまして秋谷 満あきや みつるといいます。翼の友人です」

翼？誰だそれ。

「あー！私、名前言ってないっすー！」

お前か。

「私、狩枝 翼かへだ つばって言うっす。翼でいいっす」

後一人は言うつもりはないらしい。だが、満はその華奢さからは想像しがたい腕力でつれてきた。

「自己紹介」

「わかったわよ。西城 涼せいじょう りょうだ」

「すみません。男性が苦手なんです」

「そうだったのか。わかった。よろしく、檜 慄夜だ」
「フン」

仲良くやっていけるか？どちらかといえば目の敵にされてるような。

「帰るぞ。満、翼」

そう言うときさっさと歩いていった。残り二人は頭を下げ、後を追う。

「やっと休める」

と呟くと楓さんは俺に言った。

「まだだよ」

「へ？」

「はい。翼ちゃんの重箱」それがあつたのだ。

「は〜」

何回目かのため息を吐くばかりだ。

後日談だ。

翼の飯はとてもおいしく妹にも見習わせたいくらいだった。
重箱じゃなければな。

第四話 小さな幸福

大きな別れ（前書き）

慄夜にとって究極の選択が始まる。

と言うところ

です。

お久しぶりです

この前初めて評価していただきました。もうありがとうの一言につきます。もしよければどしどし意見お願いします。

第四話 小さな幸福

大きな別れ

「あの、楓さん？」

「な～に？ りっくん」

「どこか出掛けませんかと言いましたよね？」

「うん。りっくんが言ったね」

「どう考えてもデートの誘いでしたよね？」

「そうだね」

「あのですね。なぜ、こいつらを連れて来たんですか？」

「家の前でばったり会ったの。ぜひって言われちゃったら断れないでしょ？」

へー。加奈、そしてその他大勢よ。お前ら、いつ楓さんの家の近くに引越したんだ？ 「もう！ 細かいことは気にしない！」

こいつら待ち伏せてやがったな。

「まあまあ、りっくんも大人になって許してあげなよ」

「仕方がない。わかったよ」 ふふ。と言って楓さんは俺の腕にくっついた。

「それでこそ、りっくんだ」

まったくかなわないな楓さんには。

「はーやっと着いた」

と、加奈はつぶやく。

俺たちはいつもとは違う隣のデパートに来ていた。なんでも加奈と彩菜が買いたいものがあるらしい。

他のところじゃダメなんだとか。

今日のメンバーについて説明しておこう。俺、楓さん、そしてプラスアルファの加奈、彩葉、妹、宇美、忍である。

こいつらが付き添いなのに、行く場所を指定されるのは納得いかないが今回は買物だったから許すでしょう。

余談だが一度加奈に誘われ、プロレスを見に行ったことがある。

そのプロレスは、場外乱闘戦にまで、もつれ込みあえなく巻き込まれた。全治一週間の怪我だった。それ以来プロレスなどの言葉を聞くだけで悪寒が走るようになったと言うトラウマがある。

妙に嫌な予感が当たった。俺がただ今、立っている場所。そこは下着売場、またの名をランジェリーショップ。警備員から向けられる視線は久しぶりの奇異の視線。疑惑たっぷり俺の周りをウロウロしている。あいつらはと言えば、それぞれ選びに行ってしまった。結構な広さがあるのでみんなの姿が見えないが。

少しして背中を突かれた。

「ん……………うお！」

振り向くと彩葉がいて、片手にオレンジの下着を持って自分の体にくっつけ聞いた。

「どお？ 慄夜」

もちろん素晴らしく似合っていた。だが男として、どう受け答えすれば良いかわからず、頬が赤くなっていくばかり。

「え!?! あー……………」

そこにさらに加奈が来た。彩葉と同じように下着を見せる。加奈らしい水色でしかしどこか大人びたフォルムがとても加奈に似合っていた。

「どおどお?! 慄夜?」

「えーとな。うーん…」

俺は狼狽ろうばいしていく一方だ。

「りっくんどお?」

「兄、どうだ?」

振り返るとそこには楓さんと妹が二人下着を体に付けポーズをとっていた。妹は漆黒の黒。楓さんは明るい緑。どちらも似合っているのだがどう答えてよいかわからずまたまた狼狽。

最後に忍と宇美が下着を持ってきてみせた。忍は真っ赤な下着でとても大人びた雰囲気醸し出していた。ピンク色の下着の宇美には心奪われそうになったほどだ。

「慄夜!」

「りっくん!」

「慄夜!」

「……」

「兄」

「あのー」

と詰め寄られた俺はすぐさま店から飛び出た。

帰り道。

「まったく悪ノリしすぎだ」

と俺は愚痴を漏らす。

「あんなことできるの慄夜しかないのよ。感謝してほしいくらいよ」

「そうだよ。りっくん。女の子には優しくしなきゃ」
「そう言われてもな。」

「それじゃ私たちはこれで」

と加奈と彩菜が手を振り、去っていった。

「じゃ、じゃあ私たちも行きます。今日邪魔をしてしまったお礼に」
「そういうと妹と走っていった。」

忍は無言で目配せして去った。よくわからなかったが応援ということにしておこう。

「本当に今日は大変だったですね。でもまた今度行きましょうよ。」

楓さ…ん…。どうして泣いてるんですか？」 楓さんは肩を震わせながら泣いていた。いつもと違う真剣な震える声で言った。

「ごめんね。りっくん。私、一緒にいられないの」

一緒にいられない？なんなんだそれはなんなんですか！楓さん！

「私、アメリカに行くことになったのお父さんの仕事の都合で引越すの。私がみんなの告白をOKしたのだって、そのせい。ごめんね。りっくん」

「ごめんね何て言わないで下さい！俺は楓さんじゃなければダメなんです！」

「ありがとう。りっくん。さよなら」

離れようと走りだした楓さんの背に抱きついた。

「嫌です。放したくありません」

俺は涙を流しながら言った。

「放しなさい」

と楓さんは優しく言った。

「嫌です」

頑なに拒む。

だが楓さんは優しく俺に語りかけた。

「私ね考えたのどうしたらりっくんが幸せか。私じゃ無理なんだってわかってたんだ」

「楓さんは俺の隣にいて、幸せでしたか？」

「うん。幸せだった。りっくんが大好きになってた。私の一番になってた。だからそんなりっくんを幸せにしたい、なってほしい」

「俺の幸せじゃなくて、自分の幸せを考えてください！お願いですから…」

「だから別れようりっくんまたゼロからスタートするの私は時々会いに行くからみんなと楽しんで悲しんで慰めあってそれでも私を選んでくれたら、少しだけ待ってて、りっくんの隣にいられるような人間になって帰ってくるから」

「今のままじゃダメなんですか？」

「今のままじゃダメ。まだ私、弱いから強くななくちゃ。だからね、りっくん。さよならは止めた。またねにする」

楓さんはトンと俺を押すと言った。

「りっくんには権利がある。好きな人を選ぶ権利が。誰を選んでも誰も文句は言わない。いつか選んでそして幸せになって。またね、私の一番大好きなりっくん」

走りだした楓さんを追わなかった。俺には権利がある。だからその時がくれば俺が心変わりしていなければ、楓さんを選べば良いだけなんだ。

いつか共にいられたら楓さんを幸せにしよう。と誓いながら家に帰った。

後日、俺たちは空港で楓さんを見送った。また会おうと言う期待

を乗せ、飛行機にむかって大きく手を振った。

第五話 涼の悩みの種（前書き）

今回は涼、中心です
がどうぞ！

遅れました

第五話 涼の悩みの種

『楓さんへ』

調子はどうですか？俺たちは元気です。

みんなは俺に気を遣ってくれてる。そんなに気を遣う必要はないのにな。

今日はあいつらと遊園地に行くことになったよ。翼とかもついてくるってはしゃいでた。こっち来たら俺と楓さんだけで行きましよう。ではまた、送ります

慄夜』

俺は携帯にそう打ち込みメールを送った。携帯をたたみポケットにしまい、俺は家をあとにした。

「……遅いな」

「夜遅くまで服を選んでいて、就寝したのは三時過ぎだったとか…」

俺の問い掛けに答えたのは少し引きつった笑顔の満。

「それで遅刻か？」

「いつものこと。遠足前の小学生だな」

「ホント慣れてんのな。そういうの」

次に答えてくれたのは、涼。俺から常に1メートル離れている。やたらと嫌われてるようだ。時々睨まれることもある。

「ごめんっす」

「まあ、元気の空回りということですし、皆さんも許していますから」

「先輩に申し訳ないっす」 落ち込んでいる翼を慰めている満。まるで姉と妹だ。落ち込んでいるのに見兼ねた俺は話し掛けた。

「いや、俺は気にしてないし、そんなに落ち込まれたら困る」
申し訳なさそうに笑った。笑ったし、よしとしよう。

「落ち着きがないからだ。翼、きみはいつもいつも遅刻する。私としては遅刻などされるのは嫌いなんだ。いい加減大人になりなさい」
素晴らしく冷めた物言い。翼は絶句している。満は今までみたこともない形相で涼に言った。

「そこまで言わなくてもいいじゃない！翼だって気を付けようとし生懸命……！」

「いつものことだ。と諦めるのが正解だとは思えない。甘やかし過ぎだ。満」

そう涼は言うときささと歩いていった。翼はそのまま、うつむいていた。

加奈がコソコソと近づいてきた。

「ねえ、あの子たち。仲良しなんですよ？」

「そうなんだけどな」

「しょうがない。慄夜、翼ちゃんはまかせて」

「はあ。どうゆうことだ？」

「私が翼ちゃんを元気づけるから慄夜は涼ちゃんの方をお願い」
嫌なほう押しつけてないか？

「もう！さっさと行く！」 と背中を蹴り飛ばされた。洩々、涼の行ったほうへと歩きだした。

涼はあっさり見つけた。自販機で買ったのだろうコーヒを片

手にベンチに座っていた。

俺は涼とは反対のベンチに座った。背中合わせという感じだ。

「なんですか？」

妙な凄味をこめられた言葉だった。同級生ならため口だったに違いない。

「何というか、やっぱりさっきの事が気になってな。友達のこと思ってたのはわかる。だが問題はそこじゃない。何をいらついでるんだ？」

涼はコーヒーをベンチに置くと言った。

「私はいつでも冷静だ」

俺は反対側に回り、涼の顔を覗き込んだ。

「冷静な奴が顔をしかめるかよ」

すると涼は顔を真っ赤にして飛び退いた。

「貴方には関係ありません！」

「関係あるな。目の前で喧嘩されたんだ。解決するまで俺は関係者さ」

「へっ、屁理屈だ！」

赤い顔のまま叫び返す。

「まあまあ落ち着けて、見られてるぞ」

「う……。くっ！」

涼はまわりで見ていた野次馬に気付き、アトラクションの方へと走っていった。しょうがない、こういう場合追い掛けなくちゃいけないだろう。

「はあ、はあ、はあ、何よ」

「いや。お前、体力無いのな」

「うるさい！人より少し劣っているだけだ！」

「いやいや。百メートルでバテバテはひどいだろ」

「くそ。お前みたいな男にこけにされるとは」

と、毒づくのを俺は聞かずに頬がゆるんだ。

「お前にも、欠点があるんだな。俺、無いと思ってたけど、くくく」

「何を笑っているんだ！この女たらしが！」

「年ごろらしく怒ってるじゃねえか。ほっとした」

俺は真っ赤になりながら怒っている涼を宥めながらそう言った。

するとさらに真っ赤になりながら、つまった声をだした。

「なっ……………！」

「いつもムスツとしてたからな。怒った顔も可愛らしかったと思うぜ」

慄夜は特に変な意味は考えずに言った。だが、その言葉に涼は耳まで赤く染めた。

「か、かわ、可愛、い？」

「ああ。他の奴は知らねえけど俺はそう思った」

「うっ、うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさーい！」

そしてまた走りだした涼を俺は追い掛けた。飽きないな、彼女も。

「落ち着いたか？」

「冷静そのものだ」

と頭をかかえた涼が答えた。そこで俺は気付いたように聞いた。

「あっ、聞きたかったんだが、何で俺を目の敵にしてたんだ？」

そう聞くと涼が肩の線を堅くした。すると言いだした。

「私には兄がいたんだ」

そういうとベンチに座った。ただ、たんたんと話します。まるで思い出を思い出すように。

「兄は優しくて、どんな人にも自分を犠牲にしても、優しかった。そんな背中を私は見ながら幸せな日々を過ごしていた。いつからか私は兄に憧れに似た恋心を抱くようになった。私はその思いを兄に伝えた。もちろんダメだったのだから。それでも、すっきりしたんだ。近くにいらればいいと思うっていた」

そこまで言い、顔をしかめた。そしてまた話します。

「でも、私が中学二年生の時、親が離婚してしまった。私は母に、兄は父に引き取られた。それから兄にあっていない。私がなぜ、慄夜さん貴方を嫌いなのかは兄に貴方が似ていたから、見れば見るだけ貴方は兄に似ていたから。だから、嫌いだった」

「だった。ってことは今は嫌いじゃないんだな？」

寂しげな笑顔でこちらを見ると言った。

「ああ。それに兄との違いも見つけたしな」

「どういうところだよ」

俺がそう言うのと涼は悪戯っぽく言った。

「兄はそんな意地悪しない」

「うるせー」

少しして二人の笑い声が響いた。

「わかったな。翼にしっかり謝れよ」

「うむ」

と言うと涼は翼と満の所に走っていった。二人は頭を下げ合っていた。

加奈がコソコソとまた近づいてきた。

「よくあそこまで改心させたわね」

「まあな」

と、言うところから離れた。夕焼けを見ながら、俺は聞こえない声で話した。

あいつは改心したのじゃない。もともとああだったんだ。なんか、妹に似ている奴だ。翼に抱きつかれて慌ててやがる。前よりやわらかく笑えてるじゃないか。そっちが似合ってるぜ。

そろそろ、秋が到来する。今はまだ夏の余韻にひたっていたい。そう思えた。

その日の夜。

涼のカレンダーにはこう書き込まれた。

『先輩が特別になった日』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5572b/>

傍からみたら不良男2

2010年10月10日06時11分発行